

ルノワールと印象派展とサロン

賀川恭子（石橋財団ブリヂストン美術館）

ルノワールは、印象派の画家として、1874年の第一回グループ展以降、1877年の第三回展まで精力的に活動していた。けれどもその後グループ展への参加を取りやめ、サロン（官展）への作品出品を再開した。そして1879年のサロンで《シャルパンティエ夫人と子どもたち》が見事に入選を果たしたことは、批評家からも「放蕩児の帰還」と好意的に評価された。

ルノワールのサロン復帰の理由については、これまでルノワールの経済的な問題が指摘されてきた。確かにルノワールは作品を売る必要を強く感じており、自身の手紙のなかでもサロンへの出品は商業的な理由からも必要なのだと言っている。「サロンで展示されない絵を気に入るかもしれない愛好家は、パリにはせいぜい15人しかいません。けれども80000人も人は、サロンに出ていない絵であれば、わずかな部分ですら買おうとしません」。しかし、このルノワールの手紙は、印象派の画家たちを売り出そうとしていた画商ポール・デュラン＝リュエルに宛てたものであり、その文章を額面通りに受け取ることはできない。

ルノワールのサロン復帰について考えるには、印象派のグループ展との関係を詳細に検討し直す必要があると発表者は考える。とりわけ注目したいのは、1877年の第三回グループ展である。ルノワールはシャルパンティエ夫妻からの注文で肖像画を制作しており、そのうちの二点《シャルパンティエ夫人の胸像》と《すわるジョルジェット・シャルパンティエ嬢》を第三回グループ展に出品している。同じ展覧会に出品された《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》や《ぶらんこ》が「影をあらわすのに全般に紫という色調を用いることで、ルノワールは多くの者の目に無知な者、規範を軽んずる者と映っていた」「かくもおかしな具合に配置された太陽の斑点は、まさに人物の衣服についた油污れそのものといった効果を生む」という酷評を受けた一方、肖像画には好意的な批評が多く寄せられた。これらの批評をルノワールのその後の活動と関連づけたいと発表者は考える。アンヌ・ディステルは、2009年の著書『ルノワール』で、1877年のグループ展のときにルノワール雑誌に匿名で寄稿した文章に注目しつつも、彼が装飾絵画の重要性について述べていること、またのちに装飾絵画に挑戦することを指摘するにとどまり、残念ながら、批評に対する画家自身の反応を考察していない。

そのため本発表では、印象派のグループ展に寄せられた批評を精読することで、ルノワールの作品がいかにかに評価されたかを検証し、その評価に対するルノワール自身の反応について考察する。そして、ルノワールが作品発表の場にかに意識的であったかを提示したい。このような視点を導入することで、自らの売り出し方に積極的に関わり、方向を模索するルノワールの姿が見えてくるのである。